

学・会・近・況 セッション企画1

Migration History around the Indian Ocean World since the Seventeenth Century

秋田 茂

2011年10月1日、第24回日本南アジア学会の第1日目に、島田竜登氏（当時西南学院大学、現・東京大学人文社会系研究科）の協力を得て、17世紀以降のインド洋世界のヒトの移動に関して、英語によるパネル“Migration History around the Indian Ocean World since the Seventeenth Century”を組織した。アジアの海域世界研究から、インド亜大陸の内部に目を向けがちな南アジア研究の現状に問題提起を行い、学会自体のカバーする射程を広げ、南アジア地域研究と隣接諸地域の地域研究（アフリカ・東南アジア・中国）との対話を目指す試みであった。

このパネルの企画は、秋田と水島司（東京大学）が中心となって過去4年間に行ってきたグローバルヒストリーの科研共同研究（基盤A：グローバルヒストリー研究の新展開と近現代世界史像の再考）から生まれた。その研究プロジェクトでは、『『長期の18世紀』におけるアジアの諸港市と後背地域の経済発展』をテーマに、アジア側の主体性を明らかにしてきた [Tsukasa Mizushima, George B. Souza and Dennis O. Flynn (eds.), 2013, *Place, Space and Time: Asian Hinterlands and Political Economic Development in the Long Eighteenth Century*, Brill, forthcoming]。従来の研究では、ヨーロッパ人のインド洋世界への海からの到来が、この広い海域世界の経済社会活動に影響を与えたとされてきたが、近年のグローバルヒストリー研究では、アジアとヨーロッパ側の双方向的な交流と影響を強調している。その過程で、アジアとヨーロッパ間貿易だけでなく、アジア域内の貿易（アジア間貿易）の成長が明らかにされてきた。本パネルでは、こうした貿易の成長にともない同時に活発化したヒトの移動（移民）に着目し、実証的にインド洋世界の変容をグローバルな世界経済、

世界システムの文脈に位置づけようと試みた。

企画にあたり、カナダのマギル大学のインド洋世界研究所 (Indian Ocean World Center: IOWC) の所長グウィン・キャンベル教授を招聘した。キャンベル教授は、英語圏世界でのインド洋世界研究を牽引する研究者で、近世のマダガスカル王国の盛衰に関して実証研究がある。教授が構想する「インド洋世界」(Indian Ocean World: IOW)は、西は喜望峰・マダガスカルから、東アフリカ沿岸、アラビア海・ペルシャ湾岸を経て、ベンガル湾、東南アジアのマラッカ海峡を経由し、さらに南シナ海・東シナ海につながる、文字通りの超広域にわたる海域世界、最初の世界経済が台頭し発展した舞台である。東アジアの日本や中国も、当然その中に包含されている。キャンベル教授の巨視的な研究に対して、日本側は、17～18世紀のオランダ東インド会社研究の島田氏、18～19世紀の西インド洋地域でのパニヤン商人研究の鈴木英明氏(日本学術振興会特別研究員)、18世紀以降のタミル人移民研究の山田協太氏(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)の3名が、それぞれの実証研究に基づいて報告を行った。本パネルでは、日本における海域史研究と、欧米における同研究との批判的接合を試みた。

最初にキャンベル氏が、“The Indian Ocean World Slave Trade over the *Longue Durée*”と題する基調報告を行った。氏の報告は、古代地中海世界から現代までの「不自由労働」形態の変遷を整理し、大西洋世界で形成・展開された黒人奴隷制を相対化する壮大なスケールの報告であった(報告に基づく論文は、2013年初頭に刊行される予定の*The International Journal of South Asian Studies*, Vol.5に掲載の予定)。

氏によれば、第一次産品生産のプランテーションでの強制労働と身分的拘束、人種主義に特徴づけられる近代奴隷制のモデルが、大西洋世界圏以外での不自由労働にも暗黙裡に適用されており、多くの奴隷が兵士として活用されたイスラム圏との相違が見逃されてきた。しかし、近年のJames Watson, Anthony Reid, Clarenth-Smith, Martin Kleinなどによるインド洋世界の地域研究および比較研究の進展により、インド洋世界における非ヨーロッパ的な債務奴隷制度の特徴と実態が解明されてきた。そこでは、非常に多様な現地独自の債務による拘束制度が存在し、James Watsonはアジアの奴隷制度を、(1)奴隷がホスト社会に統合

され比較的良好に取り扱われた「開放的」制度と、(2)大西洋世界の多くの特徴を備え、自由民と奴隷との間に厳格な障壁が存在した「閉鎖的」制度に区分している。

だが、キャンベル氏によれば、これら初期のインド洋世界の奴隷制研究は、問題を世界史的な文脈で十分に位置づけておらず、「インド洋世界経済」という広範な枠組みで課題を考察する必要がある。それは、16世紀この方のヨーロッパによる政治経済的な世界的優越というヨーロッパ中心史観の否定につながり、すでにK. N. Chauhuri, Andre Wink, Janet L. Abu-Lughod, A. G. Frankによる先行研究があるが、それらの先達はアフリカを考察の対象としていない点で問題がある。2000年以上も前の時代から、インド洋、インドネシア海域、および南シナ海独自の季節風（モンスーン）に規定されてきたインド洋世界経済の文脈に位置づけることで、国際経済の台頭、近代ヨーロッパの植民地主義、グローバル化の始動で特徴づけられてきた世界史像を相対化し、アフリカの中心的な位置を回復できる。

インド洋世界経済は、(1)西暦紀元前後、(2)10世紀から13世紀にかけての時期、そして(3)19世紀の国際経済の勃興期、以上三つの時期のそのピークがあった。それは労働集約的な世界経済であったため、これら三つの経済活動のピークは、奴隷貿易のピークでもある。

インド洋世界において、従属的な人々は、インドの奴隷はインド人、中国の奴隷は中国人というように、各地域内部で奴隷とされた。7世紀以降のムスリム社会は、イスラム教徒の奴隷化を聖典で禁じられたために、例外的であった。インド洋世界で取引された奴隷の大半が、肌の黒くないアフリカ人であり、圧倒的に若い女性と子供から構成されていた。アフリカ黒人奴隷は、アフリカ内部、インド洋西部、中東では数が少なく支配的ではなかった。さらに、19世紀の大西洋世界で奴隷制度が廃止される一方で、人身売買は、現在にいたるまでインド洋世界では続けられてきた。そこでは特に、債務奴隷と性的奴隷の人身売買が有力な身分束縛の形式であり、近代のグローバル化の前兆であった国際経済の台頭とともに、19世紀を通じて変容を遂げてきた。

日本側からは、まず島田竜登氏が、東南アジアの不自由労働力としてのオランダ東インド会社（VOC）の奴隷に着目して、“The Slavery of the

Dutch East India Company: Batavia and Nagasaki”と題する報告を行った。17～18世紀のVOCは、アジアの植民地港市で肉体労働者として多くの南アジア・東南アジア出身の奴隷を保有するとともに、ヨーロッパおよびアジア人がその支配地域において奴隷を所有することを認めていた。他の西欧諸国の東インド会社と異なり、VOCにとって奴隷は、貿易利潤を獲得するための商品ではなく、あくまでもその附属物として位置付けられていた。そのため、統計的なデータが乏しく実数は把握しにくい。VOCの奴隷は、主として兵士や建設・荷役作業の肉体労働者として、個人所有の奴隷は、家事奉公人やプランテーション労働者として使われた。VOCの本拠であったバタヴィアの場合、17世紀前半は、マラッカ、コロンボ、ゴアなどの旧ポルトガル領で獲得された戦争捕虜・債務奴隷・犯罪人などの南アジア出身者が多かった。転機は、マカッサルをVOCが獲得した1667年に訪れた。それ以降は、インドネシアの島嶼部からの奴隷がバタヴィアに大量に供給されたため、南アジア出身者の奴隷数は減少に転じた。

他方、長崎では、VOCの商館員が個人奴隷を連れて滞在したが、その絶対数は非常に少なかった。18世紀末の時点で122名の奴隷の出自が判明するが、南アジア出身者は非常に少なくわずか5名に留まり、残りの大半はインドネシアの島嶼部から連れてこられた。

次いで、インド洋世界の西側の東アフリカ沿海部と南アジアの交流史と移民については、鈴木英明氏が“Kachchhi Bhatiya's Activities and Their Networks in the 19th Century”と題する報告を行った（鈴木報告は、前掲の英文ジャーナル 2014, Vol. 6, に掲載の予定）。インド西部のカッチー地方出身のバティヤー商人コミュニティは、クリシュナ神を信仰するヴァイシュナヴ派のヒンドゥ教徒で、18世紀末から19世紀にかけて、ペルシャ湾から東アフリカ沿岸にいたるインド洋西部で独自のネットワークを構築した。その最大のハブであった東アフリカのザンジバルで彼らは、地方市場を牛耳るだけでなく、現地スルタンの御用商人・関税徴収者として、あるいはヨーロッパ人やアメリカ人商人の事業パートナーとして、さらにプランテーションの経営者として多様な事業活動を展開した。その活動は、投資や融資の網の目を通じて、出身地とも緊密なつながりを保持していた。

コミュニティ独自のルールにより、女性の海外渡航は許されておら

ず、インド洋世界におけるバニヤ商人の世界は、圧倒的に男性優位であった。従って、彼ら男性は、婚姻のため故郷に帰る必要が生じ、結婚後は家族の面倒を見るために、定期的に帰郷した。そうしたヒトの双方向的な還流移民（circulation）が、出身地カッチー地方への経済的な富の還流をもたらしたのである。

日本側の3人目の報告として、インド南部からスリランカへのタミル人の移住について、アジア建築史・都市計画史を専門とする山田協太氏が“Consideration on Unfolding of South Indian Merchant Activities and Formation of Port City Colombo: a sketch of organization and transformation of urban space since the 18th century”と題する報告を行った。山田氏は、スリランカのコロンボに見られる都市的でミクロなネットワークが有するダイナミズムを明らかにした。

コロンボは、16世紀のポルトガル、17世紀中葉からのオランダ、18世紀末からのイギリスと、時代と共に支配者が次々と交代した。ポルトガル期はパラダールとメスティソ、オランダ支配の時代はパラダール、バーガー、ムーア人が、イギリス支配下ではナティコッタイ・チェティアとバニヤンなどの各ヒンディー・コミュニティが、経済面で主要な役割を演じたが、その独自性は都市の中核としての宗教施設の配置と構成でも見られた。コロンボのミクロな都市空間の研究は、スリランカ全体、対岸のタミル・ナドゥ、さらにベンガル湾と広がる横断的なインド洋のつながり（Trans Indian Ocean Linkage）を通じて多層・複層的に緊密な連関を有する「連環都市研究」としてなされるべきである。

以上の4報告に対して、東南アジアの前近代アジア海域史研究を専門とする向正樹氏（大阪大学文学研究科）が、大阪大学で実績を有する海域アジア史研究の立場〔桃木至朗（編）、2008、『海域アジア史研究入門』、岩波書店を参照〕からコメントを行った。向氏は、(1)キャンベル報告の時期的・空間的な射程の広さを高く評価した上で、前近代の中国福建省の沿海都市では、有力なアラブ系・ベルシャ系のムスリム商人が活躍しており、彼らも1000名以上の「奴隸」を抱えていたこと、その奴隸所有は奢侈的行為であり、「見栄としての消費」（conspicuous consumption）の典型であったこと、(2)鈴木報告で取り上げられたバニヤン商人に関して、ムスリム社会内部での位置づけをさらに明確にする必要があること、(3)山田報告で分析された南アジアのコロンボの事

例と、中国・上海におけるムスリム商人層の活動との比較や、中国人ネットワークとの比較研究が不可欠であることなどを指摘した。

総合討論(質疑)では、キャンベル氏が提起した「インド洋世界」(IOW)の定義をめぐる質問があり、IOWが日本や中国など東アジア世界も含めた「開放的なシステム」(open system)であることが確認された。また、水島司氏は、19世紀の農業開発と商人資本との関連性、小農生産の拡大と商人資本とのつながりを指摘した。

以上のパネルの要約に見られるように、限られた時間ではあったが、ヒトの移動、不自由労働としての「奴隸制」を含めた労働力移動としての移民問題を通じて、IOWを舞台としたグローバルヒストリーを考える素材が提供された。鈴木氏によるインド洋西部のザンジバルでのバニヤン商人の活動に関する精緻な実証的研究は、日本の海域アジア史研究の水準の高さを示している。キャンベル氏の巨視的な問題提起と、鈴木氏や向氏のような個別的な実証研究を接合することで、新たな研究領域であるグローバルヒストリーへの信頼性が高まるであろう。このパネルでは、実証研究に支えられた関係史的手法によるグローバルヒストリー研究の可能性を示すことができた。ともすれば、内向きでミクロな事例研究にとどまる最近の南アジア歴史研究の領域でも、通説的な奴隸制研究や大西洋世界の近代奴隸制研究を相対化し、その西欧中心史観を批判しながらオルタナティブな世界史の新解釈を提起できることを示したシンポジウムであった。今後とも、欧米の第一線の研究者と対等の立場で意見交換を行う、こうした国際的な対話を続けていきたい。

最後に、本シンポのテーマと人選に関して御尽力いただいた島田氏の御協力と御好意に対して、改めてお礼申し上げたい。

あきた しげる ●大阪大学大学院文学研究科教授